

# カンボジア王国アンコール世界遺産での 海外インターンシップの成果と課題

## International Internship Program at Angkor World Heritage Site in Cambodia

木 村 誠

公立小松大学

### 1. 本事業の概要

令和元年8月17日から9月1日に、カンボジア国立アンコール遺跡整備公団（略称：アプサラ公団）を受け入れ機関とする海外インターンシップが実施された。本インターンシップは金沢大学と共同で実施するものであり、本学から3名、金沢大学から3名の学生が参加した。本事業は平成22年度から金沢大学が実施しているものであり、今回で10回目の実施となる。本学は開学した平成30年度から学生を派遣しており、今回が2回目の学生派遣であった。本プログラムは、本学が同公団と締結した「アンコール世界遺産での能力開発プログラム」に関する覚書に基づいて実施されるものである。また、本事業は今年度外務省の「日メコン交流年2019」の認定事業に位置づけられている。2週間のインターンシップ期間中、学生は3人ずつの2グループに分かれ、担当の公団職員の指導を受けながら各自の業務に従事した。本稿では、本事業の成果と今後の課題について報告する。

### 2. 業務地の概要

カンボジア王国は、1979年までのクメール・ルージュによる支配から解放された後も内戦が続いたが、1993年の国民総選挙の成功と国際社会からの支援を受けて復興の時代を迎えた。その後、現国王が即位した2004年前後頃から同国社会は復興から開発の時代に移行している。学生の業務地であるアンコール世界遺産区域は9世紀から15世紀にかけて栄えたクメール王朝が残した石造建造物群であり、1992年にUNESCO世界遺産に登録されている。世界最大規模の文化遺産であるとともに熱帯の豊かな自然の中で約13万人もの地域住民が現在も昔ながらの生活を営んでいる。内戦の影響を強く受けて製造業などの経済基盤が脆弱な同国経済が、観光産業へ依存する割合はタイなど他のASEAN域国に比して圧倒的に高く、同世界遺産を活用した観光産業は同国の

経済にとっても重要な位置を占めている。実際、同世界遺産は世界中からの観光客が訪れる観光地として成長を遂げており、その中でもアンコール・ワット寺院はトリップアドバイザー社がまとめた世界の人気観光スポット2018 ランドマーク編で最も人気のある観光地に選ばれている。カンボジアの観光庁は2020年には自国に訪れる旅行者数は750万人に達する見込みと発表しており、同国における観光産業の成長は今後も加速することが予測される。また、クメール王朝は水の都としても知られており、同遺跡群の北東に位置するクメール山から流れる水は、現在も灌漑、生活用水の供給、遺跡の地盤強化に活用されている。上流から流れる水の適切な管理は、下流の市街地を洪水から守るための要となるため、受け入れ機関であるアプサラ公団の重要な業務となっている。このような背景から、アンコール世界遺産区域は観光産業の成長にともなう地域住民の生活への影響の問題、文化財保護の問題、自然環境の保全・管理の問題などと密接に関係しており、本業務地は学生にとって観光地化や経済の発展にともなう生じる課題を多面的に理解するうえで理想的な場であると考えられる。

アンコール世界遺産はカンボジア王国の文化財であると同時に人類共通の文化遺産である。そのため、同世界遺産は国際的な管理組織であるアンコール世界遺産国際管理運営委員会とカンボジア国内の管理組織であるアンコール遺跡整備公団が相互に協力体制を構築して維持管理を行っている。本事業は国内組織であるアンコール遺跡整備公団を受け入れ先として実施された。同公団は1995年に設立されたカンボジア最大の公団であり、アンコール世界遺産の維持管理を目的として遺跡の保存や修復のみでなく、環境管理や保全、都市計画、観光産業の調整、伝統文化の保護、地域住民の保護管理などの業務も担当している。本事業は同公団の水管理部門を主となる受け入れ先として実施された。受入責任者は公団総裁のHang Peou氏である。日本側の実施体制としては、金沢大学と公立小松大学の教職員から構成されるアンコール遺跡整備公団インターンシップ実施委員会が事業の計画から実施までを担当した。筆者と金沢大学教授、本学特任教授、アンコール世界遺産国際管理運営委員会特別専門家委員を務める塚脇真二氏が引率業務と現地指導を担当した。また、現地での学生支援を担当するチューター学生として、昨年度同インターンシップに参加した金沢大学3年の酒井朋花が全行程に同行した。



Figure 1. アンコール・ワット寺院の前で

### 3. 参加学生と現地での業務

本学からの参加者は書類審査と面接試験によって選抜された。今年度の学生募集における特徴

は、国際文化交流学部からの参加学生の志望動機に昨年度参加した先輩学生からの影響が認められたことである。今年度は4月26日、27日に新入生を対象とした合宿プログラム「きずな合宿」が実施された。昨年度の参加学生は運営スタッフとして新入生とともに合宿に参加しており、昨年度のカンボジアでの学びを新入生に語ってくれたそうだ。今年度は国際文化交流学部1年の池田綾香、宮島柚果、保健医療学部臨床工学科1年の鳥生真衣が参加した。参加学生は3人ずつの2グループに分かれ、グループ毎に業務が割り振られた。宮島と鳥生は北バライ貯水池を池田は西バライ貯水池を主な業務地として担当した。一日の業務の流れは以下の通りである。午前中に公団の担当職員と業務地を訪れ、公団の取組みと現状の課題などについての説明を受ける。午後は公団の本部に戻り、午前中の視察内容を踏まえて担当職員から詳細な解説を受け、さまざまな観点からのディスカッションを行う。公団職員とのやりとりは英語で行われる。また、毎日作成する業務記録も英語で作成し、公団職員のチェックとコメントを受けることとなっている。

宮島と鳥生が配属されたグループの担当業務地である北バライ貯水池は世界遺産区域の北部に位置する巨大貯水池であり、他の貯水池よりも標高が高いところにあるため世界遺産区域の水環境を左右する重要な機能を有している。北バライの中心にはニャックポアン寺院がある。池の中央に尖塔が立ち、その周囲に4つの池が設置されているというユニークかつ美しい寺院である。近年は多くの観光客が訪れるようになり、観光開発と自然環境の保持の問題が生じている。池田が配属されたグループの担当業務地である西バライ貯水池はアンコール世界遺産区域の西方にある巨大貯水池である。南北方向が2.2キロ、東西方向が8キロあり、人工の貯水池としては人類史上最大とされている。クメール王朝の水管理の中核となる貯水池であり、建設後1000年近くが経過した現在でも地域住民への生活用水の供給、灌漑用水、遺跡の保持、洪水対策等の機能を有している。近年は、美しい夕日を鑑賞できる新しい観光地としての評価が高まっている一方で、堤防の浸食や汚染物質の流入といった課題も抱えている。貯水池に関連した場所以外にも、アンコール・ワット寺院をはじめとした代表的な遺跡、古代集落のロヴィア村、新しい建造物の建築が許可されない世界遺産区域内で増えた余剰人口対策として郊外に作られた新しい村ルンタエク・エコ・ヴィレッジ。そして、クメール伝統建築様式の次世代への継承と観光客への情報発信を目的としたクメール民族センターなどを訪れ、理解を深める機会を得た。業務の無い休日には東南アジア最大の湖であるトンレサップ湖を視察し、季節によって拡大と縮小を繰り返すこと、淡水生物の多様性や水上集落の生活について学習した。業務の最終日には公団の水部門の責任者による面談試験が実施され、全ての参加学生



Figure2. 修了証書と一緒に

が合格の判定を受けることができた。また、2週間のインターンシップを通じて学生各自が考えた改善点の提案なども面接試験の際に行われている。

帰国後、10月31日に学内英語カフェにて成果報告会を実施し、他の学生や教職員に対して参加学生が一人ずつ現地での学びを発表した。また、学生や関係教員の報告書をまとめた出版物が年度内に公刊される予定である。その他、11月3日放送の本学のラジオ広報番組「世界に向かって飛び立て！公立小松大学」に池田と宮島が出演し、現地での経験を生き生きと語ってくれた。

#### 4. 成果と課題

参加学生の成果報告会での発表内容や報告書の記述から、この2週間のインターンシップを通じて学生達が様々な学びと今後につながる気づきを得て帰国したことが窺えた。池田は、観光地での観光客の行動に関心を示しており、観光地であると同時に地域住民の信仰の場でもある寺院遺跡での観光客の適切な行動を促すための工夫の必要性について考察を深めたようだ。また、笑顔で接してくれる地域住民との交流から、内戦の時代から30年足らずで現在の状態を作り上げた、カンボジア人や関係する人達の尽力に思いを巡らせ、人が幸せに生活できる社会がいかに多くの人の努力によって成り立っているかを実感したと報告している。鳥生は郊外の村の視察の中で、家庭でのトイレの設置の重要性を地域住民にどのように理解してもらうか、とりわけ衛生管理の知識の浸透方法について問題意識を抱いたようだ。また、地域のこども医療の体制について実際に現地の病院を見る機会を得たことによって、出発前に形成していたカンボジアに対するイメージと実際のカンボジアの姿の差異を実感したことを報告している。宮島は古代集落の中に個人情報概念が芽生え始めていることに注目し、どのような要因が個人情報の意識の浸透に影響するのかについて関心を抱いたようだ。また、地域住民支援、環境保全、観光開発が密接に絡みあっていることを実感し、これらのバランスをとることの難しさについて考察を深めたことを報告している。また、外国語でのコミュニケーションについても業務を通じて新たな気づきがあったことと、更なる語学学習への動機づけの高まりが確認された。

このように、今年度の学生の報告から、彼女らが多くの学びと今後の課題への認識を得て帰国したことがわかる。一方で、学生達がこれらの気づきと動機づけの高まりを次の具体的な一歩に繋げるためには、関係する教職員からの適切な助言が必要かもしれない。今年度の参加学生はすべて一年次生であることから、今回の学びを今後の大学生活にどう活かしていくことができるのか、学生の意欲と希望に応じて適切な目標設定を共に考えることも重要だと思われる。アプサラ公団でのインターンシップは無事に終了することができた。しかしながら、今後参加学生に対してどのような帰国後の支援が必要なのかについては、担当教員の課題として私自身が検討したいと考えている。

参加学生の節度のある行動と業務への真摯な取り組み姿勢と関係各位のお力添えのおかげで、体調不良や安全管理上の問題もなく、今年度も無事に海外インターンシップを終えることが出来

た。インターンシップ期間中、学生の安全と充実した就業体験をご支援いただいたアプサラ公団 Hang 総裁、日本国大使館の関係各位、現地で学生を激励いただき、カンボジアでの生活について貴重なご助言をいただいた在シェムリアップ日本国領事事務所実取所長、本プログラムの実施責任者である塚脇真二教授をはじめ、すべての関係各位に心から深謝申し上げます。世界遺産でのインターンシップという稀有なプログラムが末永く継続できるよう、関係各位には本事業への変わらぬご支援を心からお願い申し上げます次第である。